

# 國學院大學学術情報リポジトリ

## 談話室 夏の家

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 笠間, 直穂子, Kasama, Nahoko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000129">https://doi.org/10.57529/00000129</a>

## 夏の家

笠間直穂子

ポルドーから鈍行に乗り換えて、三十分。駅を出ると、ジャン・イヴが迎えてくれた。七年ぶりに見る笑顔。車に乗って、彼とマリーの家へ向かう。

マリー・ンディアイの書く小説に衝撃を受けて訳しはじめ、最初の邦訳を刊行したのが二〇〇六年。その二年後、二冊目の訳書を出版するとき、夫である作家のジャン・イヴ・サンドレーと三人の子どもたちとともに、マリーが初めて日本を訪れた。

細かい日程表も、アテンド通訳もない、まるで友人一家がやってきたような招聘だった。帰国するころには、この来日が初対面だということも忘れていた。

この夏、ふとしたきっかけでマリーと連絡を取ることにになり、いつか再会しよう、の代わりに、会いに行きたい、と言ってみた。一家はここ七年ほど主にベルリンに住んでいるが、夏のあいだは、ベルリンへ引越す前に暮らしていた今も時々帰っているポルドー近郊の村にいる。泊まっていたって、という返事なので、二晩泊まることにした。

村に入ると、正面のY字路に石造りの二階建てが見えてきた。村の中心にどんと構える頑丈な建物なのは、ここが昔、カフェ兼ホテルだったことを知れば不思議はない。かつては村人が集う場所だったが、廃業して数十年も放置され、無惨な姿だったのを、マリーとジャン・イヴが買い取って、最初はテント暮らしをしながら、住める家になるよう少しずつ工事していった。

ジャン・イヴは大工、農業、機械にまつわる仕事はおよそ何でもできる。しかも、金をかけずに有りもので工夫する知恵と、ひらめきに従って趣向を凝らすユーモアがある。壁をぶち抜いたら出てきた昔の巨大なパン窯に砂を敷いて、枯山水風に仕立てたのには笑ってしまった。あちこちに掛かる古い看板。長女のロレーヌが幼いころ描いた壁画。

両腕で抱えるほどもある丸い物体が吊してある。漁師が使うブイだという。

広い居間兼食堂の一番奥に台所が設えてあって、「ようこそ皆様」と大書された年代不詳の古看板の下、扇形をした食器棚をカウンター代わりに、マリーがにんじんを剥いている。「今夜はポトフよ」と言つて、白い太い骨が覗く牛肉のかたまりと、野菜と、調味料を食卓に出した。

庭と畑も、ジャン・イヴに見せてもらった。元カフェ兼ホテルの庭は、栗や柿や灌木類が生い茂つて心地いい。だけど畑も欲しいから、隣の土地が売りに出されたときに買った。広くて一気には耕せないで、いまは隅に小さな菜園を作り、徐々に果樹を植えている。鋤や鍬は、これも捨ててあつた年代物。「いかにも作家らしい農具ですね、なんて土地のやつに馬鹿にされたけど、ほら、ちゃんと使えるだろ」。柳の大木に、ハンモックが吊してあつた。

次の日。お昼ごろ、「ようこそ」の看板の下、マリーが今度はトマトを切っている。赤と橙と黄と緑のトマトの山盛りを食卓に置いた。各自取り分けて、茹で玉子を添える。甘酸っぱいのが好きなら庭のラズベリーを入れるといい、というので、入れた。庭に咲く食べられる花、青紫の瑠璃萬莖と、橙色の金蓮花も載せてくれて、極彩色になつた。

午後はそれぞれ仕事をするので、家のなかはしんとなる。夕方、書きものに一段落ついたところで外へ出て、一人で庭を歩き、ハンモックに横たわつて、目を閉じた。雀と、四十雀と、黒歌鳥が鳴いていた。

夜は長男のシルヴェールがベルリンから到着し、庭の炭火コンロで串焼きをした。豚バラ肉と、鴨のハツと、パプリカ。私も少し手伝いをして、「ようこそ」の下でマリーと一緒に、半分に切つた心臓を串に刺した。あのさマリー、東京に来たとき、鶏の心臓を食べたよね、と言うと、あらほんと、そうだった、と微笑んだ。

私はよく覚えている。根津の焼き鳥屋で、どんなものが食べたいかと聞いた私に、マリーは、奇妙なものがいい、と答えたのだ。

翌日は、もう出発。朝の食卓に着いていると、高い窓から黒い細い優雅なものがひゅんと入ってきて、食堂の天井付近を半周してまた窓から出ていった。一瞬だったけれど、みんな気づいて、見あげた。「燕が直穂子のためにやってきた」とジャン・イヴが言った。もうしばらく、みんなで天井を見ていた。